登場人物設定一覧

・ほのか

Piping Collar

シンプルなノーカラージャケットは
パイピングを施すことでポイントに。
さらにフリンジデザインを加え
ひとひねりある『こなれた』印象に。
春夏も着られる薄手のツイードなので
年中使えるのも嬉しいポイント。

授業参観用私服

授業参観用私服（スカートはグレイ）

勤務中私服（参考）

霊山の神を封印するために存在する「桜川家」の家臣筆頭、家令部部長の重責を担う。容姿端麗、頭脳明晰の持ち主であり家臣最強の霊能力者でもある。その名を具現化した微笑が示す明るい性格と持ち前の美貌に加え、何事にたいしても常に公平・公正に望む姿勢や適格で強い指導力によって、家臣から絶大な信頼を集める。「漆黒の絹糸」と讃えられる長い髪は背中まで伸びており、彼女の動きに合わせた艶やかな演出をしている。

一見弱点がないようにみえるが、実は当主格のマモルに特別な感情を抱いている。彼女はお屋敷様が作った傀儡（くぐつ）であり、その魂の拠り所はマモルの母、まいのそれを複製したものだったからだ。ゆえに、ほのかは母性を強く刺激される存在としてマモルを認識しはじめ、徐々に女として自分が異性であるマモルに惹かれていることに気づく。家臣を率いる身として、神を妻と迎える当主を仰ぎ、桜川家に尽くさねばならないにもかかわらず、主家を潰すことになる個人的感情が表に出ようとしていることに強く思い悩んでいる。

マモルは女子によって千年にわたり継承されてきた桜川家にあって異端の存在である。だがゆえに、神と結合できれば開祖以来の絶大な霊力が身につくとされ、家臣たちはその日が到来するように日々を務めている。にもかかわらず、自分こそマモルと結ばれるべきだと願う気持ちを心

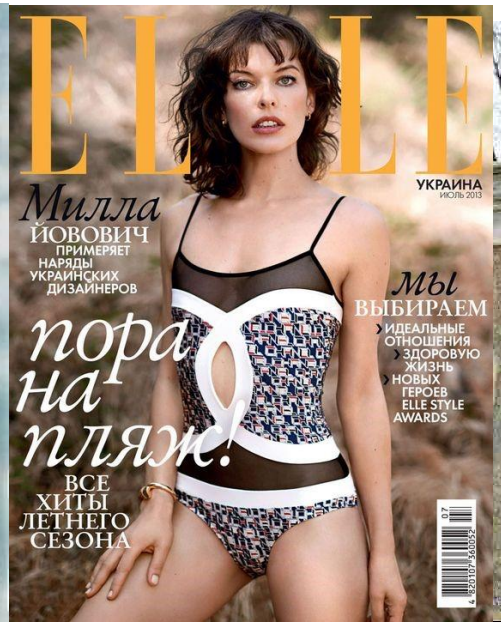
の奥底に秘めている。好物は羊羹。多彩な才能を示すが料理は不得意。勤務時は黒のスーツ・スカートに白のブラウスを着ることが多いが、時に季節に合わせた色柄の和服で仕事をすることもある。家令部には制服の指定はない。
双子の妹、闇千代とともに誕生から 2 年間お屋敷様が管理する祈祷所で過ごした（本人の意識はお屋敷様によりかなりおぼろげにされている）。

◆お屋敷様によるほのか作成の意図
ほのかとは、
1. 桜川家に対して良い印象を持たずに成長する見込みが高いマモルに対しての同家への呼び水（まいが持っていたマモルへの母性による）
2. 妹の闇千代にとって輝く存在（ほのかへの闘争心を増幅させて藤代真穂子に当主になる強い意志を高い能力を植え付けさせる）
　＊闇千代（+八雲）・真穂子によるマモル排斥　VS　ほのかたちによるマモル擁護→ほのかたちの劣勢→神によるマモル援護→不完全な状態での当主継承の儀→マモルの霊的暴走＝桜川家並びにお屋敷様の霊力回復
3. 男性であるマモルを次期当主として迎え入れるための地ならし（他者には真似できないほどの有能さと美貌、非の打ち所がない性格）
　＊女性社会であった桜川家での初の男性次期当主であったため、何もしなければ強い反発が予想された。

◆お屋敷様の誤算
まいから発する母性本能を越えて、人形でしかないはずのほのか個人が恋愛感情を持つとはまったくの予想外だった。というのも、お屋敷様自身もまた開祖が作った傀儡であり、桜川家守護のみのために存在させられた彼女は、恋愛感情を知ることなく１０００年を生きてきたから。

＜挿絵描写＞
①特別車キャデラックの車中でマモルに桜川家について微笑みをたたえながら話す（衣装未定。黒のスーツもしくは和服だが和服の場合、振袖にするか訪問着にするか悩ましい。年齢が 28 才なので未婚でも訪問着であっても不思議ではないし、大広間での接見にあたり他の班長たちと差別化ができるが、オバサン臭い印象になるのは避けたい）
②入浴にあたり、片膝を折って手桶で肩から湯をかける（長い髪を丸めて団子状にして後頭部に乗せる。うなじと団子に収まり切れなかった後れ毛の垂れ下がり具合が美しい）。透けるような白く滑らかな肌がかけれられた湯によって光り輝く。
③闇千代の精神攻撃にあい、制御下におかれる（瞳は失われ、よだれを垂れ流し、両ひざを屈して闇千代を見上げる。服装：授業参観私服）
④雑木林の隙間から見える澄み渡った空とそこに浮かぶ満月を溢れ出ようとする涙をたたえながら見つめる（服装：黒のスーツ姿）。
＊ちあきの暇乞いを認めつつも、自らは彼女のように職責を放棄できない我が身を呪い、怒りと悲しみを拳に込めて打ち込んだ正拳突きが巨石を粉砕した直後（「月下桜乱」タイトルを連想させるシーン）

・ちあき



キャラクターイメージ（大人びた雰囲気はあるが 19 才としての少女感も併せ持つ）　　修衛班指定制服（参考）

トレンチコート制服（参考）　　授業参観用私服（候補 1）　　授業参観用私服（候補 2）　　授業参観用私服（候補 3・採用）

桜家七臣の一家、武門を統括する川奈家の一人娘。卓越した才能を認められて、ほのかにより若干１７歳で代理職を経ずに屋外部長兼修衛班長に抜擢される。口数が少なく、細身で小柄、彫りが深い面長な顔つきに切れ長の細め目をしており、胸元は平均的な大きさ。
マモルにはじめて会った際、誰よりも早く、そして強く一目ぼれをしてしまう。屈指の霊力の持ち主である彼女が、神と同等の能力を保持しうる霊的資質に、いち早く反応したことが主因ではあるが、彼の純朴で陽気な性格に心惹かれた側面もある。自分にはない良さを感じとった。
　従姉妹にあたる二歳年下の生活班長ちはるには強いライバル意識があり、マモルからいつ好意を寄せられても不思議ではないと忸怩たる思いを持っている。なぜなら、彼女はマモルのそば近くを任されているだけでなく、自分とは異なり女性的魅力を十分に兼ね備えていると認識しているからだ。
　マモルに対する感情は一体どこからきているのか。母からの教育によって形成された、ちはるに負けたくないというプライドが元になっているのか。それとも純粋に異性としてのマモルに心を惹かれたからなのかは、ほのかに問いかけられた際には自分でも理解していなかった。だが、まろんに悩みを打ち明けて、今の気持ちは明らかに自分個人の感情が元になっていると気づくにいたった（霊的感応が作用していたとしても、それは相手がマモルという異性だから起こったものだから）。
これまでは動きやすさ重視で髪型はベリーショートにしてきたが、ちはるに対抗する上で女としての自分を磨いていくためにも伸ばすべきかと悩んでいる。
　武芸のみならず屋外部の全分野にわたって特異な才智を有するが、芸術関連は無知に等しいため服装などにも無関心だった。だが、女らしさを身に着けるために興味を持ち始めている。好物はショートケーキとウイスキーボンボン。来年から飲酒ができることを密かに楽しみにしている。勤務中は修衛班規定の制服、軍服風黒の長ランに長ズボン、中には白のシャツと黒のネクタイを着用している。
マモルの授業参観日前日、当日着ていくまともな服は持っていないだろうと推測したほのかのはからいで、運転手兼警護担当の名目で彼女の服選びに同行した。だが自分にあった選択などできるセンスのないちあきは売り場で何も決められない。帰宅時間も差し迫り、やむなくほのかの選定で 3 着を選びその中から決めることにしたが、それでも決められない。マモルの夕食までには戻らないといけない以上ここで時間の浪費はできないと判断し、ほのかが 3 着とも購入しちあきに渡した。「今日は夜勤は控えて明日に備えなさい。今晩のあなたの使命は、部屋でどの服がいいかよく考えることよ、いいわね」と言われる始末。

＜挿絵描写＞
①修衛班制服を着たまま、自室の畳の上で大の字になって仰向けになりぼんやり天井を見上げる（マモルとはじめて会った時からのことを思い返している）
②両腕を広げながらマモルを庇った際、瞼を閉じた顔にカラスの糞がべっとりとまとわりつくも、平静さを失わない（屋外視察に出向いたマモ

ルがちあきと初めて本格的な会話をした時、落下してきた糞がマモルに当たると気づき、咄嗟に立ち位置を入れ替えてマモルを被害から救った）

↓

クライマックス時に立ち位置を入れ替えてマモルの命を救い、自らは犠牲になるシーンの伏線（洗濯の名目で預かっていたマモルのハンカチを返しそびれていたが、絶命寸前に笑顔で返却し息を引き取る）

＊服装：トレンチコート姿の修衛班長制服

・

ちはる

キャラターイメージ

授業参観時着用私服

生活班長指定制服　　臨戦用道着　　防寒用羽織　　接見式着用振袖・袴

屋内部生活班長を務める１７歳。今年から班長職についたがこれは出仕して３年目のことであり、従姉妹のちあき同様に異例といっていいスピード出世である。ちあきが屋外部長を兼務している一方で、ちはるは屋内部長ではないが、いつもマモルのそば近くにいることができる大役を任じられている。ちあきから強烈な嫉妬心とライバル意識を持たれているが、本人は全くといっていいほど感づいていない。最近やたらと態度が冷たいなと思っている程度。明るく陽気で、前向きな性格が、こういった負の感情を鈍感にさせている部分がある。
ほのかと同じくらい長い髪をしているが、普段は動きやすさ優先のため後頭部に束ねて丸めて団子状にしていることが多い。ただ、両耳のあたりの部分は垂れ下げていて、それがトレードマークにもなっている（触覚）。考え事をするときはそこを指に巻き付ける癖がある。やや丸みを帯びた顔に比較的長身で大柄な体型は、ちあきとは完全に対照的といえる。バストは巨乳といってよく、少なくとも 10 代の家臣の中では断トツだとみられている。これは本人も自覚がある（ちあきは、ちはるに比べれば小さいが決して極端に小さいというわけでもない）。マモルから胸が大きいことを褒められたと認識しており、自信をもつようになった（マモル本人は褒めたつもりはないと言っている）。生活班が担当する幅広い分野で如何なく才能を発揮させているが、中でも医療分野においては父が医師で、祖父が漢方専門の薬剤師であるため深い造詣がある。ただし、読書が大の苦手であるため、ひたすら体得で学習してきた。ちあきが、マモルのことで嫉妬心を燃やしていたころ、ちはるはマモルに特別な感情をもってはいなかった。あまり知られていないが、実は体躯の良さをいかした武術に長けている。これは、ちはるの母の実家である川奈家の剣術道場に幼いころから通っていたからであるが、ちあきとはそこで稽古を通して親交を結んでいる。好物は焼き芋とスルメ。勤務中は生活班規定の藤色と白の矢がすり柄和服に白地の前掛け・襷をかけているが、臨戦時には紺色の道着と黒の袴（剣道用・班規定）を着用する。防寒には萌黄色の羽織を使用。
髪型特徴；触覚・だんご

＜挿絵描写＞
①鼻の下で右手人差し指を前後させて自慢げにしている（医学・薬学に詳しいと褒められている。服装：生活班制服）
②渡り廊下で手を合わせて喜ぶちはると、その様子を建物の物陰から嫉妬心をたぎらせながら眺めるちあき（落ち込んでいたちはるを元気づけようと、マモルが咄嗟に言った「ちはるは、乳、大きい」という言葉に反応した結果（服装：生活班制服）
＊本文より
客間を出たマモルは自室へと向かった。 後ろにはちはるがついて来ているが、なにも話そうとはしない。部屋には東京から送った荷物が届けら れていた。ベッドや学習机、本棚などはすでにあるべき場所に備え付けられている。 何かありましたらお声がけくださいと言い残し、部屋から 出ていこうとした時、マモルは声をかけた。ちはるに元気になってもらいたいと思ってのことだが、なにを話したらいいかわからない。勉強の ことはどうも触れてはいけないみたいだ。客観的なことで褒めて元気になってもらいたいのだが、 いまだ何を言えばいいのか思いつかない。 「いや、やっぱりなんでもないや」 苦笑いしかでてこなかった。改めて退出しようとする生活班長。余計に気落ちさせてしまったようにもみえ る。 「大丈夫だよ」 ちはるの背中にマモルの口が勝手に話してしまった。なにが大丈夫だというのか。なにも浮かんではいないではない

か、 という自責の念が込み上げる。彼女の肩がわずかに反応する。ここまできたら何かを言わねばならない強迫観念が彼を押しつぶそうとする。「何 が、でしょうか」 背中をむけたまま話す。 「ちはるはさ」 「はい、ちはるは？」 なにも出てこない。 「ち、ち」 「ち？」 マモルの視線が、 振り向いた彼女の顔から自然とその下へと移動する。 「乳、大きいから」 なんの反応も示さないちはる。マモルは、自らが犯したであろう罪 の深さを悟った。（おお！いうに事欠いて何を言ったんだぁ。急場しのぎとはいえこの一言はヤバすぎる）

・ちはや

キャラクター＆制服イメージ（胸はもっと小さい。制服を着ていれば膨らみは分からない。スカート丈は膝くらい。髪は肩にかかる程度のショートヘア）

ほのかに次ぐ桜川家 No.2 である家令部付首席代理の地位にある。感情がないのではないかと思われるほどいつも無表情で無口であり、彼女が会話をしているところを多くの人は見たことがない。もっとも接触する機会が多い家令部員とですら、必要最低限の意思疎通しかしていない始末だ。ただ、霊力においては、ちあきやちはる以上のものがあり、ゆえに１８歳にして今の職責を有している。その能力と年齢を特に買われてお屋敷様によりマモルの学友に選ばれた。このことは、ちあき・ちはるに大きな衝撃を与えることになる。小柄で細身な体型で胸も小さい。当初は、

大きい胸など軽快な動きの邪魔な存在になるだけとまるで気にしていなかったが、マモルの近くで学園生活を送る中、少しずつ彼に惹かれていく自分に気づくようになっていき、女らしさが欠落した身体に引け目を感じるようになる。ちあきとは、同様の悩みを抱いていると知って以来、同志的な感情をもつようになる。
彼女もまたお屋敷様が作った傀儡である。ほのかの後継として、１０歳違い（実際は 8 年）で誕生。その後すぐに早世した娘の魂を提供した結城家に預けられ、2 年後に 13 才として出仕。ほのかのときとは異なり、魂の拠り所が桜川まいほどの高霊能力者でなかったことに加え、お屋敷様自身の霊力も衰えていたため、霊力をほのかと同等にすることが優先されて細部にわたる造作までに手が回らなかった（感情の起伏に乏しいことや体型が素朴なのもそのせい)。趣味は散歩と風景スケッチ。極度の小食で食べる速度も非常に遅い。食事そのものに興味がなく、単なる栄養分の摂取の場だとしか考えていない。服装にも無頓着だったが、高校の制服（ブレザー）を着るようになって少し関心がでてきた。
一般常識がかなり欠落している。マモル警護のために男子トイレに行こうとしたり、着替えをマモルとともにしようとする。
冬の凛とした印象を与える雰囲気をもっており、クールビューティーの表現がふさわしい。白壁学院高校入学時より一部の生徒より男女を問わず熱烈な人気を得る。

＜挿絵描写＞
①初めて学校の制服を着て、自室で姿見の鏡を前でくるりと無表情のまま二度三度と回転している（表情に変化はないが喜んでいる。着慣れないスカートで膝から下すうすうするのを気にしているが、回るとふわりとそれが浮かぶのを面白がっている）

・かりん

キャラクターイメージ

総務班制服

屋内部長を兼務する総務班長職にある。「有能かりん」の異名をもつが、これは彼女が総務班が管轄する財政・出納・庶務・法務などに深い見識を持っていること以上に、部署間の調整や対人調停・仲裁に大きな実績を残してきたことに由来している。屋外内外部を越えた調整は本来家令部の管掌だが、当事者はまずはかりんに意見を求めることが多い。出仕した時期が遅かったため、家令部昇任はまずないことに家族や親族は残念がっているが、本人はここまでこれたことで十分に満足している。

才色兼備が集う桜川家にあって、自分は特段の能力もない。有能といわれているのも単なる社交辞令に過ぎないし、外見も中肉中背で凡庸な顔立ちだから取り立てて自信を持てるようなものもないと思っている。しかし実際はざっくばらんな性格で敵をつくるということがないことも相まって、性別を超えて周囲を惹きつける魅力にあふれている。

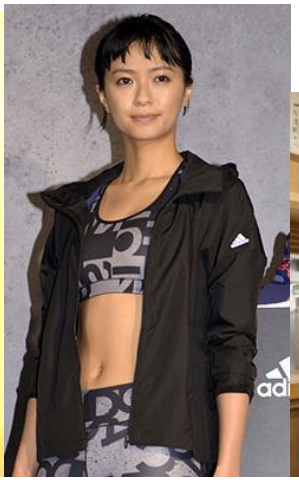
芸能班のあやめとは特に仲がいいが、その彼女から「呑兵衛トリオ」のひとりと揶揄されるほどの大の酒豪家のため、屋内部長として風紀を律する立場にありながら逆に乱す原因を作っていると日ごろからいわれている。だが、本人はまったく気にしていない。

好物は自家製のタレに漬け込んだアタリメと日本酒（中でも大吟醸）。彼女のアタリメは、ちはるを大のスルメ好きにさせたほどの旨さがある。

勤務中はグレイの生地に白のチェックが入ったベストと紺のスカートを着ている（総務班指定制服）。

＜挿絵描写＞
未定

・まろん



キャラクターイメージ　　調理班制服　　班長会議時（夜着）

調理班長。金沢で 200 年以上続く割烹料理店の次女として生まれる。姉は車両班長のまりん。両親が店で仕込みをしているところを見て興味を持ち、3 才のときには魚を三枚におろして刺身にすることができた。細身でありながら料理人とは思えない筋肉のつきをしており、鍛錬を怠ることがない。適度な筋肉はおいしい料理を作る上で必要不可欠なものというのが信条。出仕する直前まで国内はもとより海外 50 か国以上で食べ歩き、世界中の料理を作ることができる。話し方が粗野で男勝りな一面もあるが、我こそは家中でも指折りの乙女だと思っている。なぜなら、貝の身やアンコウなどグロテスクなものが苦手で、料理はしても自分ではまず食べることがないことが証明しているという。百歩譲っても姉よりは絶対に女らしいという。
あやめが指定している「呑兵衛トリオ」の一角で、好物は栗とメザシと焼酎。かりんとはよく、酒を飲みながらメザシとアタリメはどちらの方がより肴としてふさわしいか議論している。部署の垣根を越えて人望があり、悩みごとを打ち明けられることが多い。ちあきからも相談を受け、気持ちを前向きにさせるきっかけを作った。

＜挿絵描写＞
未定

・まりん

キャラクターイメージ

車両班指定作業着イメージ

接見の儀着用振袖

運転時制服

車両班長。まろんの姉。班長の中では最年長にあたる。両親から幼いころより料理のイロハを教わったが、なぜか関心を持つことができなかった。ただ、叔父が経営する自動車修理に強い興味をもった。きっかけは叔父が油まみれのつなぎ姿で店にやって来たこと。店主である父からは、場違いで汚らしい恰好で来たことにひどく叱責されていたにも関わらず、その姿を見て一目でカッコいいと思った。以来、足しげく叔父の工場に通うようになったが、当初叔父は彼女が来ることを歓迎していなかった。姉の嫁ぎ先の長子であり、料理人として桜川家に出仕することを強

く期待されていると知っていたからである。しかし、あまりに頻繁に訪れては熱心に機械類全般について尋ねるだけでなく、質問の内容も非常に的を得たものばかりであったため、機械いじりの才能があると考えるようになった。そのことをまりんの両親に話すと、一流の機械工にしてやってほしいといわれる。というのも、まりんの家では妹のまろんが料理の才能を開花させつつあったため、料理人として主家に奉公し、家業を継がせるのはまろんに決めたからだった。
「鉄は鍛えねば良鋼にはならない。同じく人間も自分を鍛えねば良い機械工にはなれない」がモットーで筋骨隆々の体格をしている叔父にならい、まりんもまた厳しい筋力トレーニングを重ね、今や並の男ではまるで叶わない肉体をもつにいたった。まさに容貌魁偉の風采をもつ。また彼女の肉体改造の取り組みは、妹が筋力をつけるきっかけにもなった。家中一番の大食漢。
かりん・まろんと並ぶ「呑兵衛トリオ」のひとり。好物は甘いもの全般とビール。独身である叔父に密かに心を寄せている。

＜挿絵描写＞
未定

・あやめ

キャラクターイメージ

キャラクター着用眼鏡

芸能班長。「風紀特命班長」の別名があるほど秩序の乱れがないか常に気を配っている。皮肉を込めてつけられたあだ名だったが当人は逆に気に

入っており、腕章をつくろうかとさえ考えている。とがった赤いふちの眼鏡がトレードマーク。茶道の家元の家に生まれたが、彼女の才は書画・華道・香道・歌道・舞曲など日本の伝統的芸術はいうに及ばす、西洋の骨董や絵画、建築、音楽などにも造詣が深い。家法である「桜川家二十七箇条掟書」を元にした同家の規範を細部に至るまで守ることを旨としており、その点では大雑把なかりんとは正反対だが、それが逆に二人の波長を合わせている。「桜川家＝お屋敷様」という見地にたち、お屋敷様に絶対的な信頼と忠誠心をもつ。主家を襲うすべての元凶がお屋敷様だと判明し、屋敷全体が貴重な什物とともに火の海に沈んでいく際、自分が信じるすべてが無くなってしまったと茫然自失となり屋敷と殉じようと覚悟したが、救出のためにやってきたかりんに説得され、一命をとりとめる。
「呑兵衛トリオ」の名付け親で飲酒を極度に嫌っているが、実はあやめ自身が大の酒好きであった。ただ、三人とは異なり酔いやすいために我を失い、自分が規律を乱すことを気にして遠ざけているだけだった。公私にわたり常に着物を着ているが、非常時には胸にアヤメの刺繍が入った特製のジャージ（薄い紫色）を班員とともに身に着ける。ほのかほどではないにしても、屈指の女性的体型と整った顔立ちをもつ。趣味は風紀取締り。好物は酒（秘密）。お屋敷様と渡り合えるほどの棋力の持ち主でもある。

＜挿絵描写＞
①炎上する屋敷の中で大切に保管してきた書画骨董の数々が灰燼に帰す様をみて、茫然自失状態にあったところを救出に来たかりんに生きるように諭される
＊あやめは藤色のジャージ姿。かりんは総務班指定制服（臨戦態勢によりスカートに深いスリットを入れて動きやすくしている）

・ろりん

キャラクターイメージ（画像よりもっと幼い。左側画像が本人に近い）

調整班長を務める 23 才。12 年前の生活班配属を皮切りに、以後園芸→車両→修衛班を 2 年おきに渡り歩き、4 年前に調整班長代理となると、その 2 年後に現職。元々、生活班在籍時は家令部へ進むためにも総務班への異動を希望していたが、11 才の若さで奉公にでたため、多くの経験を積ませようとする当時の家令部長の判断で屋外部転出が決まった。上層部の意向を知ったろりんは、これで家令部へ上がることはなくなったと大いに嘆いたが、今は自分のような存在がいなければお家は保たれないのだから、これも立派なお役目だと思うようになっている。

極端な低身長で垂れ目な顔つきはまさに童顔そのもの。噂では出仕以来身長がまったく伸びていないといわれるが、これは事実に反しており、2.5ｃｍ大きくなっている。桜川家は能力第一主義で家柄は出世に関係しないとちはるから聞かされ、だから小学生でも班長になれるのかとマモルに思わせたくらい。実年齢を聞かされて大いに驚いている。加えて寡黙であり、家令部のちはや以上に喋るということをしない。自分の幼い見た目を少しでも大人びた雰囲気にするための苦肉の策であった。

桜川家では苗字を名乗ることは禁じられている。出仕してしまえば出自は関係なく、当主のもとに公平に扱われるという趣旨による。また、名前も必ず平仮名三文字と決められているが、それが源氏名なのか本名なのかは人によって異なる。例えばほのかやちはや、ちはる、ちあきなどは本名だが、まろんやまりん、あやめは源氏名である（まろんは栗好きだったから。まりんは師匠である叔父の苗字である中海から、あやめは自家の家紋からとった）。ろりんは本名だが、「ロリコン」を想起させるため毛嫌っている。漢字では「露凛」と書き、両親の思いが込められているのは分かっていても、当人はこの名前のせいで自分は成長することができなかったと信じて疑わない。

好物は茄子と干し大根。嫌いなものは人参とトマトとピーマンと牛乳。趣味は種々の採集を目的とした山歩き。

＜挿絵描写＞
①農園で園芸班の作業着を着て鍬で土を耕していたところを、視察に来たマモルたち（ちはる・かえで）に声を掛けられため、作業を止めて完全無表情で鍬を置き、軍手をはずす（鍬は彼女専用の小型の鍬）。

・かえで

キャラクターイメージ

ボア付きジャンパー（作業用）

園芸班指定作業着

左が庭園案内時服装（シフォンシースルー　ボウタイブラウス）

庭木の手入れや農作業、山林管理などを担当する園芸班の班長。15 才で生活班に配属された 2 年後に園芸班に移り、以後現在まで同班所属。はっきりとした目鼻立ちとは逆に控えめな性格をしている。桜川家所有の 100 万坪ともいわれる敷地のどこになんの植物がどの程度生えているかを、事細かく把握する博覧強記ぶりは周囲を驚かせることがある。草木のひとつひとつに深い愛情を注ぐが、中でも自分の名前でもあるかえでには深い愛着がある。ゆえに、もみじとかえでを取り違えるような発言を聞くと、人が変わったように場所も気にせず長弁舌をたれようとするのが玉に瑕。

ファザコンの傾向が強く、その反動なのか異性に興味がなかった。ほのかに身も心も捧げたいと思っていたが、マモルの登場で心境に変化がでてくるようになる。きっかけはマモルが父親の影響で大の自然好きで、中でも植物に関心があると言ったこと。そして、もみじとかえでの違いを正しく理解していたことにある。かえでもまた植物や自然に興味をもったのは父の趣味に感化されたことに始まる。父はプロゴルファー、母は元バレーボールのオリンピック代表選手という体育会系の家に生まれたが、体を動かすことは好きでも、スポーツはあまり得意ではない。反射神経が鈍いからと自分では思っている。

趣味は森林浴兼昼寝。時間があれば巡回を兼ねてハンモックを持ち歩き、いくつかあるお気に入りの場所で昼寝をしたいのだが、時間がなかなか取れないのが最近の悩み。ろりんと山歩きを共にすることもしばしばある。好物は羊羹。敬愛するほのかに薦められて一気にはまってしまった。

母親を知らずに育ったマモルに、大人の女性としての美しさをほのかと並んで強く印象付けるほどの美女。

＜挿絵描写＞

①口下手な彼女が視察に来たマモルになんとか応対しようとこわばった笑顔で話す（服装：園芸班作業着・すっぴんに近い化粧）＋急いでフォーマルに着替える。化粧もそれに合わせて変えてきており息を軽く切らせ、照れながら話す（楓ともみじの違いをマモルが正しく認識していたことが契機となり、親近感をもったため）
＊作業着姿のときと着替え後の様子が対比できる構図

・かすみ

キャラクターイメージ

修衛班長代理を務め 5 年前から現職。彼女が班長になれないのは、ちあきのスピード出世にもよるが、それ以上に本人の極度のあがり症が主因である。個人としての能力は高いため日常業務は難なくこなすことはできるが、いざという時に即座に身体が反応せず、指揮もままならない。体格は人並み以上だが童顔である。ゆえに、軍服風の班の制服を着ると長身の子どもがコスプレをしているように見えるのではと気にしている。27 才であるため、そろそろ暇乞いを考えなければならず実家からは見合いの話がきている。相手のことはそれなりに気に入っているが、できれば最後にひと花咲かせてから辞去したいと考えている。ほのかと同期出仕であるため、彼女の活躍と苦悩を付かず離れずの距離からみてきた。闇千代による襲撃後、ほのかが屋敷を離れるにあたり「館内甲種緊急臨戦体制」を発令したため、屋敷内の指揮権が家令部から修衛班に移行。その際現場に班長のちあきがいなかったため、班長代理であるかすみが指揮権を握ることになった。闇千代が仕掛けた昆虫や獣類の襲撃と第二波である八雲が放った数百匹の野犬からの攻撃にあたり、周囲のサポートも受けながら適切な采配を振るい、屋敷を守った。
趣味は読書で特に推理小説は洋の東西を問わず読んでいる。班長代理では個室が与えられないため、蔵書館に寄付をしてその資金で自分の好きな小説を購入・保管してもらっている。好物は梨と焼き肉。

＜挿絵描写＞
未定

・お屋敷様

キャラクターイメージ（もっと凛としている）

着用服

当主に次ぐ地位にあり、当主不在時は家令部部長を任命し、桜川家の最終意思を決定できる権能を有する。見た目は７０歳代程度にしかみえないが、実際は開祖が同家存続機能として作成した傀儡（くぐつ）であり１０００年以上の命脈を保っている。霊山の神を捕縛した際に収容した莫大な霊力の一部を使い作られた。ゆえに、彼女の存続には膨大な霊力を必要とするため、当主継承の儀に際し、霊山の神から本来当主が受け取るべき霊力の一部を自らのものとして取り込んできた。

時間の経過とともに成長したほのかなどとは異なり、誕生当時から老女の姿だった。これは、ほのかのように特定の魂を元にせず無数の霊魂の集合体を土台としていることに由来する。よって彼女は自身が作り出した傀儡より、より人形らしい存在ともいえる。長い白髪を生え際から水引で後ろで束ねており、服装は巫女装束のいで立ちで白い小袖に朱色が生える緋袴を着用し、白地の足袋を履いている。背筋は曲がることなく、姿勢は常によい。細身で長身の部類に入る。

表屋敷と渡り廊下で繋がれた別棟に暮らし、普段はそこから出ることはほとんどない。配膳や布団の上げ下げ、洗濯などを除けば自身が暮らす領域のことを本人が自ら行っているため、どのような生活をしているのか謎に包まれている。別棟の広さは当主が暮らす奥屋敷と比べても遜色ない大きさであり、さらにその奥には立ち入りが認められていない祈祷所と呼ばれる施設もある。ほのかと闇千代はそこで育った。

趣味は囲碁と将棋。ときどきほのかや家令部員・生活班員などが相手をするが、まともに相手になれるのはほのかとあやめ、ちあきくらい。囲碁将棋とも四～五段の棋力と推定される。好物は干し柿と餅。

まいが当主を継承しないまま家を出たことにより桜川家の霊力が減少しているため一日も早く当主継承の儀を執り行う必要があると公表してい

るが、ほのか・闇千代・ちはやを誕生させたことにより実情はさらに深刻だった。中でも自らの霊力が衰退していることに危惧している。現状を打破するには開祖に並ぶかもしれない霊的潜在能力を保持するマモルこそふさわしいと考えている。霊的感受性を高めるために当て馬としての藤代真穂子を用意するなど、準備に余念がなかったのは裏の一面もあった。望んでいたのは神との結合によって誕生する高霊能力者としての真條マモルではなく、制御しきれずに暴走してしまう高い霊力をすべて自らが吸収することにあった。お家はじまって以来の霊的衰退を克服するにはこれ以外に方法はないと考えている。神の子を確実に授かるため夜伽には高い関心を示しながら、霊的・精神的修練は野放図だったのは、それが霊的暴走の妨げになるからであった。
マモルの母、まいが当主継承をしなかったことがすべての元凶とも認識しているため、子が母の罪を代わりに死をもって償うのは当然との思いもある。

＜挿絵描写＞
未定

・マモル

絶大な霊力をもって霊山の神を封印することを家業とする桜川家の次期当主として扱われる。つい最近までごく普通の 17 才の高校生だったが、父が交通事故によって死亡すると大きく環境が一変した。母親を幼いころに失っていたので父親が死去したことで孤児となってしまったのである。マモルとしては、桜川家には母が父と駆け落ちをしなければならない原因を作ったという印象しかなく、父方の実家とも疎遠であったため、一人で暮らしていく覚悟をもっていた。しかし、ほのかからの「新しい家族になりたい」という言葉を受けて少しずつ気持ちに変化が生まれ、身を寄せることとなった。
当主になる気はない。自分は単なる居候の身として住まわせてもらうだけだという事前合意はなし崩しに反故にされ、入居当日より「次期当主」として位置づけられた。抗議を試みるも、当主としては扱っていない。ただ、桜川家唯一の血統が屋敷にいる以上、少なくとも当主格として扱わないわけにはいかないというのが生活班長ちはるからの回答だった。納得しがたい部分もあったが、居候の身で多くを望むのは身勝手だと判断し矛をおさめ、新しい日常が始まる。
同居人（家臣）は全員が美目麗しい若い女性ばかり。加えて自分の身の回りは全てだれかがしてくれるという生活は、父とふたり、男だけで暮らしてきたこれまでとは大きく様相を異にしていた。そんな日常にも少しずつ順応してきたころ、共に暮らす 60 名ちかい女性たちは、ことごとく自分の性的対象であり、いつ何をしても構わないと知らされ、愕然とする。霊山の神を妻として迎え結合することが最終目的であるため、マ

モルには性交渉をするうえでの肉体的、技術的訓練が必要であり、彼女たちはそのための実験台的素材でもあるというのだ。
彼の感情は爆発した。これがほのかがいう「新しい家族」というものなのか。姉や妹を性的対象として捉えることのどこが家族なのか。思いのたけをぶちまけて、家を飛び出てしまう。
実は、ここまでの彼の行動は、お屋敷様が敷いたレールの上を歩んだに過ぎなかった。そもそも、父親の交通事故死すらお屋敷様が仕組んだものだったのだ。急速な霊力減少に悩まされ、一日も早いマモルの屋敷来訪・神との結合を急ぐ強硬手段であった。
マモルは、特別見た目に優れているということはなく、これまで異性と交際したこともなかったが、桜川家に来てからというもの、なぜか女たちの心を鷲掴みにしていった。忠誠心の枠を超えた異性としてのマモルに心を惹かれているのだ。
高い霊力を保持している彼女たちは、開祖以来初めての男性当主候補の存在に霊的に感応しているといえる。1000 年の時空を超えた悠久の霊的魅力に引き込まれているのである。彼が感情を爆発させた際に、その場にいた全員が声をそろえていかなる命にも従うと答えたのは、単なる公的義務意識よりも本人が持つ秘められた霊的魅力による部分の方が大きかったのだが、彼はそのことをまるで理解していない。
見た目のみならず、性格もおとなしめで陽気な面以外は特筆すべきものはないが、中学入学以来陸上部に所属しており脚力には多少自信がある。
彼は「奥屋敷」と呼ばれる表屋敷とは渡り廊下でつながった館で暮らしている。そこは桜川家当主が暮らす場所であり、当主に子ができた場合も想定してかなり広めに作られている。どの部屋も母屋の大広間に比肩しうるほどの精緻な装飾や襖絵などが随所にみることができる。居候である自分がこのような立派で広い空間に住むのは筋違いだ。ほかの部屋にしてほしい。と申し出ても、ほかにあてがう場所がないとけんもほろろに断られている。本音をいえば、狭くていいからもっと暖かい空間で生活したいと願っている。都会生まれで現代住居しか知らないマモルには、田舎の日本家屋での冬の生活はかなりつらいことだった。
典型的な朴念仁で、性に対して信じられないほど疎い。「夜伽」を「添い寝」の別の言い回しくらいにしか考えなかったくらい。

＜挿絵描写＞
本人だけのものはなし

・闇千代

容姿はほのかと同じだが肌は小麦色

授業参観用私服（イメージ 1）

授業参観用私服（イメージ 2）

まいの魂を分割して作られた、ほのかの妹にあたる存在。ふたりはお屋敷様の別棟で生を受け、15 才（実際は 2 歳）になるまで家臣たちには秘匿された状態で共に暮らしてきたが、その頃の記憶が闇千代にはあってもほのかには失われていた。非常におぼろげで誰かと一緒に生活していたような気がするがよく分からない。思い出そうとすると、気持ちが悪くなってしまう。代わりに両親を早くに失ったためお屋敷様に引き取られたという偽りの記憶を埋め込まれている（ほのかには自分を人間と思わせ、闇千代にはありのままの人形としての認識を持たせる＝闇千代の負の感情生成）。
能力はほのかと互角で、外見も色が浅黒いことを除けばほぼ同じである。一子相伝であるはずの桜川家の隠れ分家、「藤代家」の指南役を務める。同家の存在はお屋敷様のみが把握しており、500 年以上にわたって支援し続けてきた。マモルの誕生に際し、同じ年に藤代家にも女子が生まれたことを知り、養育係として送り込まれた（同時期にほのかも桜川家出仕）。開祖が当主を女子とした理由を知っているお屋敷様からは、藤代家の女子には場合によってはマモルにかわって当主になってもらう可能性を考えての措置だと聞かされる。男子が桜川家を継承する場合どのような弊害がおこるか予測できておらず、真穂子は保険だという説明を受けていた。
闇千代は期待通りに藤代家の女子、真穂子を見事に育て上げ桜川家当主にふさわしい能力を身に着けさせた。そこでお屋敷様はマモルが屋敷に来た時点で大きな決断をくだす。それは真穂子+闇千代対マモル+ほのか（+ちはや）の戦いの中で、勝った方を当主とするというものだった。だがこれは、マモルをより早く当主の器にさせるための促成装置でしかない出来レースだった。真穂子たちは正当な流れをくむマモルには適わない。なぜならたとえそのときマモルに霊的能力が皆無で闇千代がほのかより能力的に優れていようと、どこかで神は正統後継者マモルに力を貸すことは明白であり、結果として結合を早める良い機会になるとみていたのである。真穂子と闇千代は所詮は咬ませ犬的存在でしかなかった。
ただ、闇千代はお屋敷様の思惑を最後まで見通していた。それでも勝負に出たのは、真穂子が死を賭してでも当主の座を望んでいることと、ほのかの影として生まれた自分が、実力はほのかに勝るとお屋敷様に認めさせたかったのだ。姉ばかり優遇する親への妹の意趣返しの心境だった。
特技は攻撃的精神制御と昆虫や動物などを管理下において意のままに操ること。この術を使い、窮地に立たされた真穂子を救援すべく桜川家襲撃を一時中断して離脱を図ろうとする自分の代役として数万の昆虫や獣、野鳥などを送り込んだ。おかげで、いち早く屋敷を離れたほのか以外の家臣をその場にしばらく釘付けにすることに成功している。また、蛇と蛙の霊魂の集合体に霊山に逃げ込んだマモルを追撃させてもいる。
恨みの的でしかなかった姉のほのかとは決戦の中で次第に分かりあえるようになり、最後には一連の騒動を巻き起こした人物であり、自分の創造主であるお屋敷様を姉とともに自らの命と引き換えに消滅をはかった。

＜挿絵描写＞
未定

・藤代真穂子

キャラクターイメージ１　　キャラクターイメージ２（胸はここまで大きくない）　キャラクターイメージ３　　足首のフリフリ（？）は不要

500 年以上にわたり日の目を見ずに不当・不遇な扱いを受けてきた桜川家の隠れ分家、藤代家の一人娘。
白壁学院高校 2 年生。校内のアイドル的存在であり 17 才とは思えない大人びた端正な顔立ちをもつ。完成された体型といかなる状況でも的確な行動がとれる機敏な運動能力を兼ね備えており、武術・スポーツ全般を得意としている。勉学においても苦手とするものはなく、料理や音楽、芸術分野にも幅広い才能をすでに開花させている。これらの多彩な才智は本人の血の滲む努力の結晶であるが、彼女をここまでにさせた原動力はひとえに、藤代家積年の宿願である桜川家当主となり本家を奪うことにあった。多芸多才な家臣たちを黙らせるには、自らが彼らの専管分野のすべてにおいて勝る必要があると認識してのことだったのだ。
表向きは社交的性格により級友や教師から厚い信頼を得ているが、胸の奥では他人を認めようとはせず常に自分は孤高な存在であると意識している。転校してきたばかりのマモルには殴る蹴るの暴行を行い敵対的な行動をとる。開創以来女子が当主を務めてきた桜川家にあって男子であるマモルは不適格者。家の汚名をそそぐためにも、自分こそ当主にふさわしいと思っているからである。指南役の闇千代、八雲とともにマモル達に立ちはだかる。
強力な霊力を誇り、その力は桜川家臣最強のほのかをも凌ぐ。入部体験時の部室での乱闘や、屋敷を飛び出しバスで霊山に向かおうとするマモルを車中から拉致し、学校で抹殺を狙う際には自分のシンパである友人たちの心を掌握し攻撃に加担させた。
何事も完璧にこなせる彼女でもナメクジだけは大の苦手で、反射的に何かにつかまりたくなってしまう。この最大の弱点をマモルの前で見せてしまったことがあり、彼に抱きつくという醜態をさらしてしまう。だがその時感じた柔らかく抱擁される感覚は、敵性対象としてのみ認識していたマモルを別の視点でみるきっかけを作った。のちにこれが恋の始まりであり、霊的に感応した結果でもあるということに気づく。この気持

ちの変化に神が敵を援護したことが加わると彼女に厭戦気分をもたせ、闇千代・八雲に真穂子を根本から変えてしまいかねないマモルをより強力に敵視する結果をもたらす。真穂子が願っていた共闘の実現は、皮肉にも共闘対象への彼女の恋慕が達成させたことになる。当初、ふたりはマモルの処遇に興味がなかった。真穂子を当主にさせることが彼らの目的であり、その実現に支障がでない状況が発生するのなら、生死は気にかけないつもりでいた。マモルが駅で電車に乗り東京へ戻る決断をしたならそのままにしておけと闇千代が進言したのも、こうした心境にあったからだ。桜川家を汚す存在としか映っていなかった真穂子は、どちらに転ぼうと殺すつもりでいたからだ。だがこの判断も、そもそも自分の決意を揺るがせつつある存在を消し去ることで、無理やり初志貫徹させようとしたことが原因にある。
決戦にあたり、お互いが刺し違える覚悟でとどめを与えようとした際に中に割って入り、当主に自分がなる代わりに双方に思いとどまるように提案する。もはや彼女にとって当主の座などなんの関心もなかった。できることなら、桜川家も藤代家もなくマモルとともにこれからの人生を歩んでいきたい。しかしそれが叶わないというのなら、せめてマモルには生きて幸せになってもらうのが残された望みだ。ここで双方が身を引けば、自分・桜川家・闇千代（と八雲）の三方が一両損で丸くことが収まるではないかと諭した。

＜挿絵描写＞
①学校の地学準備室でマモルに殴る蹴るの暴行をはたらく。
②校門近くのイチョウの大樹下でナメクジが肩に落下して、思わずマモルに抱きつき大声を上げる。
＊上記ともに服装は学校制服
③高熱にうなされながら、幼いころより育んできた桜川家当主になる野望とマモルへの情愛の念との間で葛藤し、自問自答する。
＊暗闇に支配された空間で制服姿で直立し腕を組んで問う真穂子と、パジャマ姿でうなだれながら正座をして答える真穂子（問う真穂子は空中に浮いているような位置で問われる真穂子を見下すように、馬鹿にするように眺めている）

・八雲（やくも）

キャラクターイメージ

藤代家に 100 年以上前から住んでいる白銀色の狼で推定年齢は 500 歳～700 歳。体はライオンくらいの大きさがある。人語を理解し話すこともできる。元は北海道の山地で神として祀られていた。近代に入り開拓が進むと多くの狼が殺され、信仰していたアイヌ人も近代化の波に押され減少すると、霊力が大幅に衰退し生存が脅かされる事態になる。そこを当時移住してきた藤代家の分家によって救出され、お屋敷様による霊力回復を経て藤代本家に預けられた。このため藤代家には大きな恩義を感じている。真穂子の野望にも積極的に協力しようとしているが、闇千代とはまったくそりが合わない。両者ともに藤代家を支える大黒柱は自分であり、藤代家（真穂子）の野望を達成させるのも自分だと自負しているためだ。闇千代は八雲を番犬程度としかみなしていないし、八雲は闇千代を 10 数年前にやってきた人間もどきの新参者としか考えていない。二人とも名前を呼ぶことはなく「白いの」「黒いの」というだけ。闇千代が「指南役」を任されているというのなら、自分は藤代家を守護せよと言われているから「守護職」を与えられている。決して風下に立っているわけではないなどと対立し続けていた。職責上、邸宅にいることが多かったが、闇千代が気落ちして怪我までした真穂子を連れ帰って来たのを見て、自らも前面に出る必要を感じた。それ以降、闇千代との共闘がはじまる。ちなみに、八雲は真穂子を「お控え様」と呼ぶが、闇千代は「お嬢」と呼び捨てにしているのも八雲は大いに気に入らない。

＜挿絵描写＞
未定

・開祖

「古今和歌集」の選者や「土佐日記」の著者、三十六歌仙の一人としても知られる紀貫之を指す。仮名文字を文学的価値まで高めたほどの才能と、当代きっての霊能力を融合させた「言の葉使い」とよばれる特異な能力を身に着ける。これは自らが発する言葉そのものに霊力を持たせ目的を達成させる方法で、中でも詩歌にした言葉には強力な霊力を融合させることができた。
彼が歌人・霊能力者として不動の地位を確立したころ、関東で平将門の反乱が発生。朝廷は鎮圧のために軍を差し向けたが、一方で裏で支えていると目された霊山の神を封じ込める必要にも迫られた。そこで白羽の矢がたったのがすでに老齢の域にあった紀貫之であった。彼は京の都から選りすぐりの家臣 7 名とともに下向し激戦の末ようやく霊山の神を封じ込めることに成功する。そして今後このようなことが起こらないように永続的封印装置を作ることを決める。それが「桜川家」であった。神を封印した際に回収した膨大な霊力を用い、お屋敷様を作成し封印の中心に据えるとともに、神と自分との間に生まれた子を当主に置いた。彼は神との闘いにあたり、自らが勝利した暁にはいかなる要求も果たしてもらうという約定に則り、一子を授けてもらったのだ。生まれてきた子は女子だったが、これは本人が望んだことだった。女子は比較的高い霊力を身に着けることが多いが、一方で飛びぬけて強い霊力も有しない。だが、男子は場合によっては自分でも制御できない力を現し暴走することも考えられたからだ。これは彼自身がもつ辛く苦い経験をもとにしていた。
因みに、彼が創設した「桜川家」家名の由来は、神との闘いでとどめの一撃に発した句「つねよりも 春へになれば 桜川 なみの花こそ まなくよすらめ」からきている。
＊開祖は神との間に封印を解いた者には必ず結合の意思を問う約定を取り交わしていた。よってマモルにもそれを問う義務を有している。だが、マモルの霊 的鍛錬の未熟さを知った神は今はそのときではないと知るや彼に成長のための時間を与えることにした。

＜挿絵描写＞
未定

・まい

キャラクターイメージ

真條マモルの母にして真條孝太郎の妻。ほのかと闇千代の霊的拠り所でもある。
神の子として祭り上げられている自身の存在価値に疑問を感じ、神の子を産まなければならない運命に抗おうとする。屋敷の奥深くに安置された「奥ノ院」は神を封印する鍵の役割をもつが、一方で神と桜川家次期当主が対話をすることもできる場所でもある。ここでまいは己が未来について当主ではない生き方を選びたいと述べた。わたしは神の子ではあっても神ではない。わたしの体内にも開祖から流れる人間としての血潮が受け継がれているのだから、人間として一生を終えたいと伝えた。このように考えるきっかけを与えてくれた真條孝太郎に深く思いを寄せるようになり、ついには駆け落ちを果たして真條マモルを出産する。

まいの思い（奥ノ院での神との対話）

　我が子が桜川に身を寄せるとき、その子はこの家を忌避する感情を持っているだろう。わたしはもちろん、孝太郎も死んだあとでないとここには来ない。その悲 しみと怒りの矛先を桜川に向けるのは火を見るよりも明らかだ。とくにわたしは早世する。それは歴代当主が歩んできた道であり、逃れることはできない。当主最 大の義務は子をなすことであり、育てることは望まれてはいない。わたしも早くに母を失い、お屋敷様の下で育てられた。我が子がここに来ることは、苦労と災厄を与えるだろう。ありふれた生活が一変し、お屋敷様が当主継承の儀を強要するだろうから。

　わたしが死んでも孝太郎がいる限りお屋敷様は我が子に手を出すことはできない。自分の死が間近と判断したとき、わたしは孝太郎に霊力をすべて移譲する。 そうすれば、彼は自分で霊力を操ることはできずともわたしの霊力は彼と我が子をお屋敷様から護るだろう。しかし、それも限界がある。その時が訪れれば、我が子 はここにやってくることになる。そこで神に頼みたい。我が子を護り、今の桜川家を崩壊させる手助けを。

　あなたは罪を犯した。だが、もう 1000 年以上前のこと。その罪は赦されていいころだ。そもそも人が神を封印するなど身の程をわきまえぬ所

業ともいえる。神とはすなわち自然であり、自然は人に恩恵をもたらすとともに、ときに災厄をもたらす存在でもあるのだから。禁固 1000 年の罪をまっとうさせるために存立してい たのが桜川家ならば、その役割はもう終焉を迎えている。ならば、神の子という不自然さに生まれ、生贄としての宿命を背負わされた桜川家当主の不幸を解き放ち、 家臣たちにも自由に生きる選択を与えてやってほしい。

＜挿絵描写＞
未定

・真條孝太郎

キャラクターイメージ

マモルの父。まいの夫。大学で民俗学を教える准教授だったが、お屋敷様に仕組まれた交通事故にあい 47 才で死亡。妻となる桜川まいとは大学院生だったときに白壁学院がある街で知り合う。地図を持って辺りを見回していた折、道の角でまいと出合い頭の衝突をしてしまう。落としてしまった地図を拾った彼女はそれが観光マップではなく国土地理院発行の地形図であることに気づき、来訪の意図を尋ねる。孝太郎がこの地域の民俗調査をしており、とくに霊山に関わる信仰について調査をしていると知ると、朴とつとした風貌や穏やかな性格も相まって十歳年上の彼に興味を持つようになる。その後は定期的に放課後に会うようになり、まいは己の身分を隠しながらも孝太郎にとって貴重な情報提供者兼アシスタントとなっていく。まいが卒業式を迎えた当日、孝太郎は彼女から自分が桜川家の次期当主であることを聞かされる（学校では桜川姓は使用せず春川と名乗っていた)。研究対象の中枢にあった桜川家の後継者が身近にいたことに驚愕するとともに、彼女は近々良き日を選び当主継承の儀を行うことを聞く。孝太郎はこれまで調査してきた研究成果を踏まえて持論を展開、継承の儀は今や形骸化したものになっていると説く。そして家のための人生ではなく自分が思う人生を歩むべきだと諭す。

＜挿絵描写＞
未定

・霊山の神

太平洋側に近い関東北辺部に位置する御津根山（みづねやま）山頂に宿る神のこと。同山には男山と女山の二つの山頂があるが、二神がいるのではなくひとつの神が鎮座する場所が二か所ある。人類がこの地に住まうようになって以来、数万年の間厚い信仰集めている。1000 年ほど前に関東に独立王国を打ち立てようとした平将門の霊的後ろ盾として暗躍したため、朝廷により差し向けられた紀貫之により封印されてしまい現在に至る。封印機能を永続的に持続させるためにつくられた桜川家により管理されている。
桜川まいとは当主継承の儀を行わなかった代わりに、彼女が孝太郎と駆け落ちをする最後のひと押しをすることになった。儀式を行わないことで封印の力が弱まることを見越して、まいは神と密約を結ぶ。それは、もし自分が生んだ子がこの地にやって来たら必ず庇護するというものだった。まいとの約定を結ばなくとも彼女が継承の儀をしなければ確実に封印の霊力は落ちる。神にとってはいい取引とは言えなかったが、閉じこもるのもそろそろ飽きてきたのも事実であり、事態が面白い方向に進むのならばと引き受けることにした。

神のまいに対する回答（於、奥ノ院）

お前の推測は正しい。封印されて 1000 年がたった頃から桜川の霊力は明らかに衰えてきている。お前の祖父は人とは思えぬ霊力の持ち主だったが、1000 年の時は 彼奴の才能をそのまま継承させることを認めなかったらしい。霊力を受け入れる器が小さくなっているのだ。ゆえに我が身が自由になるのもそう遠くはない。だが、 それがお前の子の代なのか数代あとのことなのかは知らぬ。万年を生きた我にとって、数十年の時間差などないに等しい違いなのだ。お前が結合をしないというの なら、それはさらに早まる。しかし、自ら封印を解こうとは思わぬ。我は人に負けた。神であるわが身を人の尺度で罪人扱するための戦いに負けたのだ。なんとも人 らしい愚かな行為といえよう。森羅万象に罰を与えようとするのと同じことなのだからな。愚かなことではあるが、それこそが我とお前の祖父との間で交わした約 定。破るわけにはいかぬ。しかし、お前の子が我を召喚し、封印を解くというのならば話は別だ。

お前は愛する者と結ばれたいがためにこの家を出ようとしている。結合が行われないことでこの家の霊力が弱まるのは、身勝手な行動の帰結によるもので我を思 ってのことではない。なのに封印の力がさらに弱まったらお前の子を護るように頼んでいる。随分と虫のいい願いだ。だが、いいだろう。我はお前の子を庇護し、あ だなす敵を排除することを約定しよう。その方が何かと面白そうではあるからな。しかし、それはその者が我との結合を求めぬときに限る。言っておくが、我を召喚 し我を動かす誘惑に打ち勝てぬようではその者は結合を受諾してしまうだろう。我からの契りの問は人にとって最上の魅惑なのだ。お前の子がもし男であったなら、 それはさらに強まる。女としての我を征服する欲望を抑えられる男などいない。

＜挿絵描写＞

①地上から昇天する直前にマモルを抱擁し「悲しみを乗り越えて己を鍛えよ。その時がくれば我は誓約を果たすだろう」と優しく述べる。

＊神のイメージが固定化していない。しかし女として具現化した以上、ほのか以上に誰もが美人と思える容姿のハズ。服装も決まらない。天照大御神が参考になるが、色々見てもまさにこれ！と思えるものがない（いくつか候補を描いてもらう可能性あり）。

諸概念・組織等解説一覧

・キャッチフレーズ

その楽園は彼に女難（もしくは受難）を誘う（もしくは導く）

その楽園は彼に受難を与える（決定！？）→サブタイトルで使用？

・霊力と神

肉体が保持する力、体力と同様に霊もまた力を有する。これを霊力という。霊は生きとし生けるものすべてに宿り、肉体（有機体）に霊（魂）

が宿ることで生命が誕生する。逆に両者が分離することで生命は死を迎える。
肉体が鍛錬を重ねることで体力を向上させることができるように、霊力も修練を重ねることでその能力を強くすることができる。だが、体力とは異なり、誰もが努力すれば見合うだけの結果が得られる訳ではない。個々がもつ霊的潜在能力の大きさが絶対的に左右されるからだ。体力の向上は気力、精神力の強化につながり、両者は正比例の関係にある。一流のアスリートは強靭な気力・精神力の持ち主であることが好例といえる。ただ、一流のアスリートが一流の霊能力者に繋がらないことからも分かるように、体力・気力（精神力）上昇は霊力強化に正比例するわけではなく、その者が霊的潜在能力が高い時に限り高めていくことができる。言い換えれば一流のアスリートがもし霊的潜在能力の持ち主で、霊力を高める手段を知っていれば、その彼（彼女）は霊能力者になれるということになる。

真條マモルは稀に見る霊的潜在能力の持ち主ではあるが、鍛錬を行っていないため霊力を使うことはできない。
霊力とは火薬の一種と考えれば分かりやすい。適切に扱えば実に有用だが、誤れば一大事を引き起こす。安定した利用に必要なのが肉体的・精神的鍛錬なのだ。火薬の例に当てはめれば、安全に保管する機能や利用法の熟知にあたる。もし、火薬についてなんの知識もない人間が大量の保有を裸の状態で任されたらどうなるか。何かのはずみで火がついてしまえば、その結果はいうまでもない。
修練は重ねていないが、霊的潜在能力はすこぶる高いという危険極まりない状態のマモルに目をつけたのがお屋敷様だった。衰退していた桜川家と自らの霊力を根本から回復させるには、年齢がある程度まで到達したときに霊力を暴走させ、その力をすべて取り込んでしまう以外に方法はないと考えたのだ。彼の霊力を暴走させるきっかけ、それが神との結合を意味する「当主継承の儀」であった。
結合により授かるはずの「神の子」を確実に得るために夜伽には関心を示しても、修練は無関心であったのはそのためである。

有機体にはすべからく霊が宿ると述べたが、では人間以外の生物における霊力はどうか。そもそも霊に尊卑というものは存在しない。人間だろうがオケラだろうが生命は個体に一つしかないのだから、霊も個々に一つしかない。ただし、霊力においては大きな差が生まれる。人間は他の生物に比べて長命であり、なにより鍛えようとする意志と方術を知っているため霊力を高めることができる。片や、人間以外の存在が大きな霊力を持つには、数百年、数千年という気の遠くなるような歳月が必要となる。変化は非常に遅いものの、時間が経過するだけでも霊力は強くなっていくのだ。大樹に霊力があると思われているのは、長い年月に耐えうる生命力があるからである。

ごく稀にではあるが狐や狼、熊といった哺乳類が神として祀られるくらいの霊力を有することもある。これはいくつもの例外的現象が一つの個体に重ねて起きて初めて発生する事象だが、どの場合でも、少なくともその個体が規格外の霊的潜在能力を保持していたことが最低必要要件となっている。

霊は有機物に発生するもので、無機物には生まれない。だが、霊が集まる集積地などとして活用されることはある。巨石や山そのものが神、もしくはその依り代とされるのは、そこに多くの霊が集積するからである。

神とは無数の霊が結合してできた存在で、その中心はそれを信仰してきた人々の霊によって存立している。

火や水の発生、気象の変化といった現象は、たびたび霊力によって引き起こされる。また、通常では考えられない距離を瞬時で移動したり、人間をはじめとする生物を意のままに動かすということ、自身や他者を霊的・物理的攻撃から身を守る防御能力としても活用されることがある。時間と空間を一時的に管理下におくことや疑似生命体を作り出すことすらも場合によっては可能である。

桜川家に集う、マモルを除いた 59 名全員は高度に鍛えられた霊能力者である。開祖に準ずる最高位霊能力者の末裔、「桜家七臣家」の流れを汲んでいるからだ。ゆえに全員が上記した能力の一部、ないしは大部分を、お屋敷様・ほのか・ちはやはすべてを保持している。マモルはこれまで霊的鍛錬を全く行ってこなかったため、霊的素質は誰よりも恵まれていながら霊力は発現していない。

神とは霊と祈りに代表される思念の集合体である。よって神は人がいないところには発生しない。人あっての神であり、神あっての人ではないのが西洋のそれと根本的に異なる。神の力は集まる霊力の大きさによって決まるため集合した霊や思念が少数であっても、各々が大きな霊力を有していれば神は大きな力を得る。逆に一つ一つの霊の力が弱くとも数が多ければこれもまた強力な神が誕生する。霊山の神は後者の部類に属す。

霊力には重力とよく似た特性もある。重力（引力）は発生源が大きければ大きいほどより大きな力が働き、周囲のものを引き寄せる力がある。霊力も同様で、巨大な霊力の集合体である神には周辺にある霊を集める作用がある。したがい、意思をもつことのない動植物が死んで霊が分離された際に近郊に神が存在していれば、それは神に吸収され神の一部となる。これは怨念や負の思念が強固に含まれた悪霊と呼ばれる存在も神は取り込む原理にもなっている。
人間の霊を中心に神が形成されている以上、人間と同じく神自体に善悪というものはない。

霊力の巨大な集合体である神を封印させている力が霊力であることからも分かるように、霊力は霊力によってその力を維持させた状態で保つことができる。藤代真穂子の霊力は藤代家家祖、桜川しずの霊力をそのまま継承したものである。西野・藤代歴代当主は男子であったが、彼らは単にしずの霊力を保存しておくための容器の役割を担ったにすぎない。結果的にみれば同家 500 年の霊力継承は、真條マモルに呼応して誕生したかのような藤代真穂子に与えるために行われてきたといえる。

・桜川家

霊山の神を永続的に封印させるための装置として、のちに開祖と呼ばれるようになる平安時代中期の歌人・霊能力者、紀貫之により創設された。初代当主には霊山の神と紀貫之の間に生まれた女子がつき、以後 1000 年以上にわたり女子が当主を継承し続けてきた。だが先代の次期当主、まいが神との結合（当主継承の儀）を直前に一般の男性と駆け落ちをして結婚、男子を出産してしまう。神の子の血脈が男子として誕生しただけでも非常事態であるにも関わらず、まいは産後の肥立ちが良くなかったことが原因でその 2 年後他界してしまう。このことで桜川家は女子の正統後継者は存在しなくなるという未曽有の危機を迎えることとなった。事ここに至り、お屋敷様は正当な血統を有してはいるが男子である真條マモルを暫定当主に据えて急場をしのぎ、神との結合を一日でも早く行い女子を誕生させようとする。マモルはあくまでも次の当主を作らせるための捨て駒。結合がうまくいき神の子が誕生するのであれば彼がどのような最期を迎えようと大きな問題ではないと考えている。桜川家の血を引くものの隠れ分家として存在が公表されていなかった藤代真穂子を当て駒に使い、マモルの能力開発促進に一役買ってもらおうと画策する。同家は創設時は当主と開祖から与えられた 7 名の家臣一族だけで構成された小さな集団でしかなかったが、時代が下り中世に入ると鎌倉に成立した武家政権から厚い信仰を得るにいたり勢力を拡大していく。関東を一時支配し独立王国を築こうとした平将門を支援していた強大な神を、霊力で封じ込めている実績が評価され、自らも霊的庇護を受けようとする思惑からであった。以後、関東に拠点をもった武家勢力（室町鎌倉府・小田原北条氏・佐竹氏・徳川氏など）からも同様の信奉を受けた。桜川家を庇護することは、関東における正当な支配権を確立した証明でもあると目されるようになったのだ。ただし、桜川家が常に社会から隠された存在であったため、通常の神社や仏閣とは異なり表立っての政治的演出には利用できない。あくまでも政権の精神的支柱としての機能と霊的な庇護が求められた。なお、現在桜川家の家臣は全国に広がっているが、その最も大きな原因は江戸期における徳川親藩や譜代大名、有力外様大名が徳川本宗家に忠誠を誓う証しとして、専管技能を有する桜家七臣家の一流を各家が招聘したことが大きい。時代はさらに下り封建社会が終焉を迎え近代に移行しても、政権との結びつきに変化はなかった。名前が江戸から東京に変わり都が移されたため、関東の安定こそ初期明治政府の最重要課題だったからだ。また、財政的にひっ迫していた新政府としては桜川家が鎌倉時代以来寄進されてきた莫大な資金にも着目していた。すなわち、東京にある旧大名屋敷など政府が管理していた土地や徳川家の所領と桜川家の有する金や銀などとを交換するというものだった。この提案はすんなりと受け入れられ、以後桜川家は東京の主要地域のみならず全国に土地を有することになった。これは、近代化が進み主要都市の地価が上昇することで、同家に大きな富をもたらすことになる。またこの金は勃興してきた財閥企業や銀行の融資にも充てられたことでさらに膨れ上がり、現在ではほぼすべての主要企業や学校・病院等で同家が影響力を行使できるまでになった。ただ、同資金は桜川の名は表に出ることなく使われており、すべて家臣団の中で桜家七臣家と財政に明るい家により運用されているが、どの家もまた自らの名前は表にでないようにしている。

· 桜川家屋敷

車寄せ玄関を正面に見た表屋敷

正門

大広間に隣接した廊下（右が大広間・左が庭）

大広間中段の間から上段の間を見る（中段の間の下に下段の間）

＊上段と中段の間に段差はない

大広間の精緻な欄間

書院の間（段差無し）

表屋敷と奥屋敷や別棟とを結ぶ渡り廊下

庭園 1

庭園 2

庭園 3

＊上記よりも芝生の面積が大きい（芝 5 割　池 3 割　築山・島・石ほか 2 割）

＊全体としてここまで煌びやかではない。黒色を主体とした質実剛健な構造の中に所々で豪華さがあるのが桜川家屋敷の特徴

江戸幕府三代将軍、徳川家光によって寄進されたものを現在でもほとんど手を加えず使用している。最高の格式を与えられた大名屋敷の構造をしており、中でも大広間と書院の間は江戸城のそれを縮小して模した豪華さがある。
屋敷は大きく表（屋敷）・奥（屋敷）・別棟の三つに区分される。表、もしくは表屋敷は公的な空間にあたり、合計百畳を超える大広間（上段の間・中段の間・下段の間で構成）や大広間以上に格式がある書院の間、当主執務の間、屋内部各班の詰所や台所がある。ここが全体の八割を占める。奥（屋敷）は当主の私的空間である。寝起きや食事、親しい者との接見、入浴などはここで行われる。当主に子ができたことも想定してかなりゆとりをもった構造をしており、建坪だけで 100 坪の広さがある。別棟はお屋敷様が住居する場所にあたる。奥（屋敷）と変わらぬ広さを誇っており、彼女の権力の大きさを物語っている。生活が謎に包まれているため、内部の構造もよく分かっていない。別棟のさらに奥に祈祷所と呼ばれる建物があるが、ここはお屋敷様以外は立入禁止となっている。
これらの三区域は横長の表屋敷を中心に凹型の形で繋がっている。車寄せがある玄関を正面に見たとき、表屋敷左端と渡り廊下で結ばれているのが奥屋敷、右端と同様の渡り廊下で行き来できるのが別棟である。
現代社会にあって、この屋敷の営みは古来とほとんど変わらない。インターネット環境はいうに及ばず、電機は通ってはいるものの照明以外には使われていない。ガスも厨房の一部でしか利用されていない。電話も固定電話が２台あるだけという徹底ぶり。新聞や雑誌は閲覧可能だが、蔵書館（図書館兼博物館機能を持った施設）に行かないと見ることができない。暖房などに利用されているエネルギーの中心はいまだ薪や炭となっている。
東京育ちで現代住居に住んでいたマモルは、桜川家での夜の寒さに耐えられずなかなか眠れなかった。２月下旬のまだ寒さ厳しい中で典型的な日本家屋の生活に慣れるのは一苦労だった。

・奥ノ院

神を封印するための鍵の役割をもつ場所。桜川家屋敷最深部に位置する。神自体は霊山にいるが、神を山に閉じ込めておくための機能を果たしているため、奥ノ院での封印機能が失われる時、神は解放される。桜川家当主継承の儀はここで執り行われ、神を一時的に霊山より召喚させて次期当主との結合が行われる。これにより当主が神から強大な霊力を授かるだけでなく、時間の経過とともに減少していく奥ノ院の封印能力が強化され、お屋敷様の霊力も増強されることになる。
一方この場所は神と桜川家次期当主が対話をすることができる場所でもある。桜川まいは当主継承の儀こそ行わなかったが、儀式前日に奥ノ院に出向き神との対話を行う。その結果導きだした結論が真條孝太郎との駆け落ちだった。

・桜家七臣家（おうかしちしんけ）

600 家を超える家臣団を束ねる七家、嵯蔵（さくら）・米倉（よねくら）・峰元（みねもと）・御厨（みくりや）・守屋（もりや）・川森（かわもり）・川奈（かわな）の各家を指す。開祖、紀貫之が関東下向に際し同行した 7 人の家臣たちがそれぞれの始祖となっており、この 7 家のいずれかにすべての桜川家臣団の家はつながっていく（桜家七臣二十七流）。七家には管掌分野があり、嵯蔵・米倉両家が財務、峰元は芸能、御厨は調理、守屋が営繕と園芸・農業、川森・川奈が武芸となっている。かつては七臣家の中でも序列が存在した。頂点には嵯蔵家が立ち、残りの米倉・峰元・御厨の屋内部系三家が続いた。屋外部系の守屋・川森・川奈の三家はかなり低くみられていたが、時代の変遷に伴い中世以降に政治権力の中心が武家に移ると次第に屋外部系が力をつけていき、近世に入ると七家は完全に対等な関係とみなされるようになった。
現在七家には上下関係が存在しないため、主家への取次や各家間の調整・折衝のための役職が設置されている。これを惣領という。同職は各家の宗家の中で最年長の者が就任するのが習わしとなっており、現在の惣領は峰元家から出ている。齢 96 歳になる峰元かおりが 30 年以上にわたり君臨しているのだ。彼女は芸能班長あやめの曾祖母であり、ひ孫の奉公が終わるまでは惣領も家督も譲る気はないと公言している。なお、あやめにとって峰元かおりは母方の曾祖母であり、彼女自身は峰元姓ではない。
桜家七臣家こそ、お屋敷様、ならびに時の家令部長の意向をくみ、桜川家の霊的・経済的実力をもって日本の各界に隠れた影響を及ぼしている執行機関といえる。

・藤代家

同家成立は、戦国時代に起こった神の子が双子として誕生したことから端を発する。
双生児が生存権を獲得できるようになったのは現代になってからで、それまでは異端の存在として忌み嫌われた。出産時に双子と判明するとその場で二人目は処分されることが当然の慣習であったのだ。歴史上の人物で双子が登場することがないのはこうしたことが背景としてある。
桜川家にあっても双子の誕生は大きな衝撃となったが、さすがに神の子を生まれてすぐに殺すことは控えられた。二人は未熟児として生まれたため、生存させることを決めた乳児が早死してしまう可能性も上記の決断を後押ししている。ただこのことはお屋敷様と当時の家令などごく一部の中で極秘機密として扱われ、二番目に生まれた乳児は当主継承の儀にあたりそば近くで控えていた家臣の家に移された。時は流れ、無事に成長した次期当主の当主継承が目前に迫ると、お屋敷様は一子相伝の鉄則が崩れる要因になりうる二人目を処分する命を下す。神の子とはいえいつまで異端の輩を生かしておくのかという家臣たちからの無言の圧力に応えた措置ともいえる（その筆頭格が川奈家）。だが、これは表立ってのことであり実際は二人目を預けた家には子どもを連れて逐電するように密命を与えていた。この家こそが藤代家であり、末裔として誕生した

のが藤代真穂子となる。当時は群雄割拠・下剋上の時代であり、桜川家といえども安穏としていられる情勢ではなかった。こうした時代背景がお家存続のためお屋敷様に苦肉の決断をさせた。
桜川家がある街に隣接する全国屈指の学園都市で最大規模の総合病院を経営し、同市中心部に洋風の大邸宅を構えている。
藤代家は元は西野姓を名乗っており、川奈家の支流にあたる。それが双子の片割れである桜川しずを伴い、上方で逃亡生活を始めるようになってからはこの苗字を使わなくなった。逐電から 100 年ほど経過した江戸初期になると、桜川家でもしずの存在が忘れ去られようとしていた。この頃を見計らい、お屋敷様の支援の元に大阪で薬学の知識を得た五代目弥右衛門（しずと西野家嫡男との間に生まれた男子が初代弥右衛門）が江戸で薬種問屋「開智堂」を開く。身元は隠しながらもようやく世に出る機会が巡ってきたといえる。開智堂は明治に入り近代的な製薬会社に変身をとげ開智堂製薬株式会社が発足。また医師・薬剤師の養成を目的とする開智堂医薬学校を設立させた。これは現在の開智堂大学の前身である。この頃姓を「藤代」とし、政府に届け出ている。現代に入り、研究学園都市構想が計画されると、いち早く総合病院開設を決断。以後藤代本家が同病院「藤代記念総合病院」の経営に専念し、会社・学校に関しては分家に委ねると、藤代本家は東京から研究学園都市に転居した。実に 500 年ぶりの里帰りが実現したことになる。現院長は三代目で藤代真穂子の父が務めている。母は副院長。祖父母は同じ敷地に和風の隠居所を設けて生活している。祖父は藤代記念総合病院の名誉院長・開智堂製薬最高顧問・学校法人開智堂大学名誉理事長でもある。

・学校法人白壁学院

白壁学院高校・中学校・小学校を運営している。桜川家歴代当主と家臣団の子女に近代的一般教養を習得させることを主目的に創立され、以来 130 年以上にわたり同家の支援を受けてきた。法人理事長には川奈家の流れをくむ家が世襲している。現在お屋敷様の意向により、真條マモルや藤代真穂子、結城ちはやが高校に、15 才以下の数名の家臣が中学校、小学校に通学している。また、未出仕の者 10 数名も通っている。私学としては規模は大きくはなく、小学校 400 名・中学校 200 名・高校 450 名程度でしかない。学力的には中の上から上の下程度の生徒が通う学校で、部活動もとくに活発ということもない。どこにでもありそうな普通の学園といったところだが、これは目立つことを嫌う桜川家の意向が強く反映されてのことである。

・桜川家家臣（直臣）ステータス並びに待遇等

桜川家には家臣と直臣（じきしん）とで大きな違いがある。家臣とは七臣家二十七流を汲む 600 余りの家に所属する者たちの総称であり、年齢や性別は一切関係ない。一方で直臣とは、桜川家による考査を経て直接雇用された家臣をさす。よって彼らは女性であり、年齢も 30 歳未満の者ということになる。在職にあたっての年齢制限は「桜川家掟書二十七箇条」には記載されてはいないが、主家を支えるため次世代を産み育てることは義務として明記されている。このため暗黙の了解で暇乞いは 30 歳未満となっている（近代以前は 25 才程度であった）。
直臣になるには厳しい審査を通過する必要がある。忠誠心や霊力の強さ、希望する管掌分野のスキルはもちろんのこと、容姿についても問われる。考査は毎年 2 月初旬に行われ、例年倍率は 3〜5 倍となっている。それほど高い倍率ではないようにもみえるが、応募者全員が相応の能力をみにつけているため合格はかなり難しい。したがって、姉妹で出仕が許されたまりん・まろんは快挙を成し遂げたということになり、この家にとっては後世まで語り継がれる栄誉ということになる。晴れて直臣となればその待遇は非常に恵まれている。まず合格者の家に支度金の名目で 3000 万円が与えられる。当事者は在職期間中は特別な許可がない限り外出は認められないが、金銭的な負担は一切ない。必要な私物があればすべて主家が用意してくれるし、実家のために購入したいものがあった場合も基本的には了承され、数百万円程度ならば理由すら問われない。また、借財の申し出も基本的には認められ、数億円単位までであれば低利かつ長期返済での融資が受けられる。この制度を利用して実家の自宅を購入したり、親が実業家であれば工場や設備投資の資金にすることもある。慰労金という名の退職金の額も高額で、たとえ無役で終わった者でも 10 年程度務めていれば、1 億円近い額が支給される。
直臣のステータスはかなり高い。桜川家臣というだけでも同家の支配が及ぶ企業や団体にはそれなりの影響力を行使できるが、直臣となればなおさらである。その気になれば、地元首長の首を挿げ替えるくらいのことも場合によっては可能であり、軋轢が生じた勢力間の仲裁といったこともできる。
ほのかがマモルの授業参観に出向いたとき、白壁学院は上へ下への大騒ぎとなったのはこうしたことが背景としてある。ちなみに、家令部長まで上り詰めると、退職金は 1 年間で 2 億円が加算される。ほのかの場合は現在 6 年間その任にあるので、12 億円以上の退職金が支給されることになる。
奉公を終えた女たちには見合い話が山のように舞い込む。それは家臣の家からだけでなく、桜川家に近づきたいと願う有力企業の家庭などからもやってくる。こうした事情もあり、直臣になりたいと願う者は数多い。

・キャデラック（1953 年製）

桜川家当主と特別に認められた者だけが乗車を認められる特別車。次期当主と位置付けられるマモルの通学に利用されている。外観は生産当時と変わらないが、内部は常に最新の機能・性能に置き換えられている。
マモルが桜川家にやって来た際に、最寄駅までほのかが車両班長のまりんの運転で迎えに行ったときも使われた。
なお、キャデラックは歴代アメリカ大統領専用車としても採用されている。

・班長会議

囲炉裏の間は 12 畳で囲炉裏の長さも上記の 2 倍ある。　　囲炉裏の間にあるものは上記（中央画像）より一回り大きく、鉄瓶の横でイカなどを炙ることができる
囲炉裏の口も 2 つある。

班長長屋の囲炉裏の間で行われる。屋内部班長会議と屋外部班長会議、全体班長会議とがある。作中で描写されるのは全体班長会議だが公的なものではなく、生活班長ちはるからマモルについての感想を聞く私的な集まり。そのためざっくばらんな中で進行される。

＜挿絵描写＞

8 名の班長全員があつまり和気あいあいとした雰囲気を出している。
囲炉裏とは別に置かれた火鉢で熱燗を作り、それを取り囲む総務班かりんと調理班まろんを顎で指しながら芸能班あやめに楽し気に話しかける車両班まりんに対して茶を入れる手を止めてあきれ顔でいる芸能班長。かりんは火鉢中央にある熱燗が入った鉄瓶の横で真剣な様子でイカをあぶっている（彼女の脇に特製タレに漬け込んだアタリメが入った瓶がある）。園芸班かえでは横にいてニンマリ笑顔のちはるに視線を送っている（表情には出ていないが話を早く聞きたがっている）。調整班ろりんは無表情のままただ黙って正座。修衛班ちあきはなんだか様子が暗い。
＊服装は全員制服・作業着姿が原則だが車両班長まりんは運転時制服、園芸班ろりんはマモルから褒められたブラウス姿、調理班まろんは甚兵衛を着ている
＊上記に含まれていない着座位置関係は任意